

會



報

1955年7月

180

日本山岳會

ネパール
に就いて

成瀬 岩雄

この度ネパールに出掛けるに際し一番氣に掛つていた事は昨年のサマ事件以来ネパール政府が其後の善後處置について色々骨折つてくれ、最早少々の問題もセツトルしたから安心して来る様にと、意味の手紙を貰つておりながら、此方としては種々の事情で今年はどうしても隊を送る事が出来なかつたので、先方に行つて何んと返事をしたのかという心配だつたのであるが、行つて見ればこれは全くの杞憂に過ぎなかつた。

それよりもネパール政府自身がサマの事件については自らの威令が遠くサマ迄及ばなかつたということについて非常に責任を感じており、サマの事件についてなほ念の爲に我々二人がやつて来たことを、むしろ恐縮している様であつた。

それだけに一九五六年の登山許可書の下附については仲々慎重であつた。又再びサマの事件の様な事があつては折角大金を使つて来て貰つても氣の毒だからとはつきり云つており、現に我々が行つてから外務省は直ぐサマ地方を含むウエストNO2地方の県知事をカトマンズに呼んで呉れ、知事と充分次回の事を打合せてから許可書を呉れるという慎重振りであつた。

一方、我々は國王の秘書、ローク、ダルシヤン君の好意によりサマの村長をカトマンズに呼んで貰つた。やつて来た村長はサマの下の村長であつたが、我々と村長のお供一名の四人はダルシヤン君、クリシュナー君立會の上で種々話し合つた。まず昨年のサマ事件の原因について聞いて見たが結局これは五三年の時のラルキヤ峠に於けるシェルパーとサマのチベット人ボーターとの喧嘩が原因であるという事であつた。當時、シェルパーの亂棒によつてチベット人の怪我が出たりしたため、サマ村民の怒りを買つた様な始末で、日本隊が来て山の神聖を汚したために雪崩が出てゴンバが流された等という事は附け足りだとの話であつた。併し現在では村民も落付いて何等の不安も無いから安心して来て呉れとの話であつた。唯、喧嘩の張本人たるシェルパー三名は再度寄越さぬ様に貰ひたいとの話であつた。次回、日本隊が来る時は自分が先頭について行つてもよいと村長は語つていた。又、ネパール外務省でも日本隊のカトマンズ出發の節はその廿日位前に人を派し、沿道の露拂いをしてやると云つていた。

又、もう一つの手段としてダルシヤン、クリシュナー兩君の提案により、サマ地方の郡長とラマの坊さんもカトマンズに呼んで貰う事にした。その翌日、早速村長のお供がサマに引返して呼びに行つた。唯、我々としてもこれ以上永くカトマンズに留まつている事は出来ないで、この方は兩君にお委せしてカトマンズを發つた次第である。外務省を初め關係者も皆マナスルについては日本隊に優先を與えたと迄云つていた。

以上の様にサマの問題については三段構えの手段を採つて来たから先づこの方は解決したと確信した次第である。

雪崩で流されたというゴンバの再建費もお賽銭のつもりで寄附してもよい位の考えは日本出發前に話題に上つていた事であるが、その所要額については我々も全然見當がつかなく、フツとした事からヒントを得た。と云うのは後日我々が國王に面會のため王宮の門前で刺を通じている時にチベット人が一人いるので、退屈まぎれに何の目的で此處に來たのか聞いて見た處、實はトリスルバザールから來たので、ゴンバの再建費二千五百ルピーを王様に御願に來たとの話。我々も思ふぬ所で新知識を得たが随分高價なものだと話し合つていたのであるが、ダルシヤン、クリシュナー兩君の話では一千ルピー位で充分だとの話であつた。勿論、村長に直接約束はして來なかつたが、兩君が何れ郡長が來た時に見積でも聞いて見るとの話であつた。

ネパールの歸りにはダージリンに寄つてシェルパーの事もヒマラヤンクラブのヘンダーソン夫人と相談して來た。茲、三年來、日本隊についていたサーダーのガルトツェンは個人的にはいゝ人間であるが、部下の統御力に乏しいとの定評があるので次回は彼の適任者があれば代えられた話も從來の隊員の間にもあつた。聞けばガルトツェンは今度ダージリンに出來た登

山學校の先生になるので隊について行く事は出来ないとの話なのでどうしても次のサーダーの事については相談して来る必要も起つた次第である。シェルパーの決定については何れ次回の隊長が最後の決定をされる筈だし、我々が決定するものでもないで、二、三の候補者の経歴等について詳細の調べだけ持つて歸つた次第である。

シェルパーの事については今年ダージリンにユニオンが出来、規定も出た。從來はヒマラヤンクラブの規定に従つていたものであつたが、今度のは被雇傭者側の作つたもので必ずしも全面的には受取り難いものである。例のテンジンがこのユニオン會長となつていて、テンジンは文盲だから秘書風の人間が下において事務に携つてゐる。従つて一應シェルパーの交渉も之からはテンジンを通じて申込むという事になるわけだ。テンジンも個人的にはいゝ人間であるが時代の英雄扱されて要するに取巻きが悪いとの話。

サーダーの日當が從來は一日八ルピーだつたのが十ルピーになつたり、シェルパー一人死んだら千ルピーだつたものが三千ルピーにはね上つたり、甚だ一方的なものであり、一應、今年の各國隊もこの規定に従つて行つた様ではあるが甚だ評判がよくないようだ。從來の様にシェルパーを澤山使つて行く様な事は段々減つて行く傾向にあるとの話も聞いた。

或意味ではシェルパーの墮落でもあり、現にイギリスの今年のカントチ隊はダージリンのシェルパーを一人も使用しなかつたそうであ

る。かねてネパール側からエベレストを試み出して以来訓練していたソラコンプの者をシェルパとして使用したそう、このイギリスの探つた處置については正に晴天の霹靂ともいふ可く、イギリスにして初めて成し得る事でもあり今更ながらヒマラヤの先覺者たるイギリス人の貫録を躍如たらしむるものである。

ネパールでは随分澤山の人が會つたが何れも日本の各隊員が夫々の樂しき思出を持つてゐる様に、先方でも皆日本の隊員については夫々の思出を語つてゐるのは喜ばしい事であつた。そして日本隊にどうしてもマナスルに登らせ度いという氣持は皆が持つてゐる。

國王にも拜謁の榮を賜つたが國王も次回の遠征については好意を被歴せられ、國王の四人のアドバイサーの一人たるガネッシュマンシン氏の話ではサマの事件については遺憾の旨の御言葉があつたと聞いた。

最後にクリシュナー君の事について一言触れて置くが彼は歸國後は唯一の日本通として大いに重用されている。氣の毒な事に彼の荷物が未だ引取れず日本に關する著書もそのために出版出来ない残念があつた。荷物が來たら日本展覽會を開くのだとも云つてゐた。

今度の我々の使命に對しても勿論献身的の援助を直接或は間接につけてくれたことを此處に改めて感謝する次第である。

☆

富士雪崩の搜索



金 坂 一 郎

昨年十一月二十八日、富士山の大雪崩の死者、行方不明者は慶應醫學部二名、東大五名、日大八名の計十五名である。この知らせが東京の各登山本部にもたらされたのは、午後から夕刻にかけて、その夜各山岳部は部外の應援者をも得て、取りあへずの救援隊を現地に派遣し、事件の重大なるにかんがみて三大學合同の對策委員會を設けた。

二十九日、かけつけた人達によつて、早朝より搜索活動が開始されたが、いかんせんピッケルとスコップ程度の器材ではあの大雪山崩に對しては螻蛄の斧というべき所である。早速その日鐵筋製のゾンデが発注され、地元において徹宵製作、翌日の搜索にそなえることになった。

その前にすでに、東大の郷君の遺體は遭難直後收容されてゐた譯であるが、ゾンデの効果は目覺ましく、三十日東大の牧田、梶川、召田の三君が、六合小屋の西側下方で發見されたが、これもすでにむなしくなつてゐた。

そも／＼遭難直後、我々は雪崩搜索の一般原則に従つて作業を開始、同時に雪崩の實態調査を始め

たわけであるが、それによつてこの雪崩に對しては、我々の持つてゐる原則論に従つて行動するのが無意味であることがわかつた。また我々の雪崩の知識は餘りにも粗雑で、これほどの雪崩になるとも解き明かすことは出来ない。少くとも日本の山でいくつもの雪崩を眺めただけの経験では話にならず、アルペンの大雪山崩程度のものをいくつも調べた人でなければ、直ちに適切な判斷を下すことは出来ないであらう。そこで我々のとつた方法は、我々の能力をもつて手におえる範圍だけでもやつて見ることであつた。

その後十二月三日まで、困難な條件を克服して搜索活動が續行されたが、その効果はむなしく、同時に山の狀態は日を追つて本來の冬富士の樣相に近ずき、三日夜の降雪は再び小規模の雪崩を發生させるに至つた。こゝにおいて合同委員會は四日早朝の偵察にもとづいて、作業の中止を決定し、この日をもつて第一次大搜索を打ち切つた。

この搜索に参加した人員は、三大學關係者六〇八名、本會學生部その他の應援登山者三九三名、警察、消防團、青年團、自衛隊等九九九名の計二、〇〇〇名に上つた。

以後四月十七日に至る間、九回の搜索隊によつて延三四日にわたり、デブリの測量、積雪の調査、デブリ下流の状況偵察、デブリに近づく便利な経路の發見、遺體搬出路の發見及び開發、雪崩發生原因推定資料の收集、融雪促進の實驗等を若いメンバーの訓練をかねて行つて來た。この間若干の遺品

を發見するなど、直接の搜索面においても得る所があつたが、燕澤方面に關しては増雪する一方で、全く手がかりが得られなかつた。

一方東京においては春の大搜索にそなえて、各大學の委員會を中心に準備が進められつゝあつたが五ヶ月の準備期間も決して長いこととはなく、遺體發見まではどうやら準備がととのつたというあつた。だしさであつた。

三月下旬、第七回搜索隊の結論は、搜索隊の活動は調査の段階からすでに發見の段階に入りつゝある、ということであつた。四月の中旬には燕澤からも遺品が露出し始め、發見の時期近きを思ひ、搜索隊は満を持して待機した。

四月十九日、大澤パトロール中の富士吉田警察署の五味巡查はお中道下方にて雪溪を踏み抜き、その下に慶應の小島君の遺體を發見した。五味巡查はそこでしばし腰を抜かしてゐたそうだが、翌二十日には自然露出した東大の高見君が六合三勾の小屋跡の上方で岳友によつて發見された。

その頃我々は二十九日以降の連休を利用して、七日間にわたる第二次大搜索を計畫していたが、二十五日には燕澤デブリ末端附近(三合二、三勾位)で日大の高野細川君が發見され、二十六日には第二次大搜索隊の第一陣として日大隊が入山、搬出と同時に搜索作業を開始した。この高野君は自然露出した所を搜索隊によつて發見されたが、細川君は搜索隊に同行したシエパード犬により、デブリ表面より一尺程の下から探し出された。第一次大搜索打ち切り後、

四月二十五日までに行動した人員は延三四四名で、うち一人名は部外者の協力による。

第二次大搜索は主としてザンゴウ掘りに向けられた。當初我々はザンゴウ掘りによつて遺體を發見するということには、餘り期待をかけることなく、むしろこれによつて融雪を促進するのがねらいであつた。ザンゴウから掘り出された雪は速かに融け、ザンゴウそのものも空氣接觸面が大きいため、融雪という意味では効果が大きいしかし我々がねらいをつけたザンゴウから四月三十日塚本、五月三日、石井、四日近澤と引きつゝ我々は少々ザンゴウ掘りに熱中した傾向がある。我々としては作業力のあるうちに出来るだけ掘つておこうというつもりであつたのだが發見のためのザンゴウ掘りは、ねらいのつけ方がうまくなければ無駄が多く、またゾンデイレンを上手に併用しなければ本當によい仕事は出来ない。なお近澤君の遺體は、ザンゴウ掘りとゾンデイレンとの併用により、當時の雪面下四メートルの所から探し出されたものである。

その後七日には慶應の堀田君が大澤お中道のすぐ上手で、自然露出した所を五味巡查によつて發見された。また同日燕澤デブリ末端附近で日大の上田君、その翌日同じく梅松君が水デブリの中から掘り出された。この邊はつるはしでやつと掘る程の土砂まじりの水であるから、ゾンデは全く用をなさず、ザンゴウ掘りによる外はなかつた。

その後はたつた一人残された日大の小松君を求めて、小人数の日大生やOBが山梨県山岳連盟傘下の登山者の援援を得て、たえず小規模の作業を續行していたが、これは第二次大捜索によつて掘り上げた雪の捨て場に困り、しばらく次の機会を待つていた譯である。

第三次大捜索は五月十八日から二十二日にかけて行われた。この頃は積雪も少なくなつていたが、やはり雪の捨て場には苦勞し、掘り終つたザンゴウのゾンデーレンがすむやいなや、このザンゴウは新たなザンゴウ掘りの雪で埋められていつた。しかしこの作業によつて、それまで全く手がゝりのなかつた小松君のルックサツクを發

見し、大きな希望が得られた。

最後の段階は第四次大捜索への待機として、小規模にザンゴウ掘りを續けると同時にデブリ表面に多くなつた土砂の除去を始めた。残雪の量も大部少くなつた。ある時期を見て、燕澤の残雪を全部掘り上げてしまおうと待機していた譯であるが、幸いこのままで行かないうちに、六月三日澤底の最も深い所、十二月當時でいえばデブリの底十數メートルの所から、小松君は顔以外殆んど變化していない状態で見出された。これ實に遭難より一八七日後のことである。

第二次大捜索開始以後の人員は延七八六名で、そのうち一一九名は山梨県山岳連盟その他の登山者

の援援である。全期間を通じて三大關係者一六〇八名、應援登山者五二三名の外に、前述の地元關係者九九九名を加えて三三〇名に達した。第二次大捜索以後の作業は全期の人員の丁度四分の一をもつて行われたことになる。

この遭難において我々が調べたこと、やつて来たこと、またこれから得た教訓は大きなものであつた。これはいづれ別の機会に發して大方の批判を得たいと考えて準備中であるが、こゝでは簡単に實行出来て、しかも効果が大きいと考えられる二點だけを提唱しておきたい。

その一つは要所々々にゾンデを配置することである。適當な鐵棒

をもつて製作されたゾンデは簡単な道具でありながら、雪崩捜索に對して大きな力を持つ。今回は地の利を得て急速に間に合わせるこゝが出来たが、一般にはこれは望めないことである。幸い今回製作したゾンデが多數餘つていたのであるから、將來必要を感じそうな山小屋その他の基地に配置したらと考える。慰靈塔の鐵筋に使うなど面白い考えだと思ふが、これは傷んで使えなくなつたもので澤山で、その他のものはよく手入れして保存されなければならない。

次の問題はやはり遭難の起りそうな各基地に、遺體凍結用の食鹽を貯蔵することである。我々は遺體を如何に處理するか、長い間の悩みの種であつたが、最後に到達した方法がこの遺體の塩蔵である。食鹽一、雪三の目方の割合でよく混合すると、上手に出来た場合零下二〇度以下、下手な場合でも零下一〇度は得られる。これでも遺體をおよい、なおその外を普通の雪で固めておくと、解剖も困難な程に凍結し、これにエヤウィツクでも併用すれば、搬出作業が容易になると同時に、餘り不快な感じを與えないで済む。我々の経験では一體につき食鹽三貫を用い二〇時間程たつて五度位の温度上昇を見ただけである。簡單な割にその効果の大きいこと、我々もやつて見て初めてわかつた。

最後にこの報告を終るにあつて、當遭難に寄せられた各位の御指導、御協力に對し、近ける人々に代つて厚く御禮申上げたい。捜索が終つてまだ落着いて省みる餘猶もないが、とに角各位より頂いた御配慮なくしては、我々はどうこの仕事をやり遂げることは出来なかつたであらう。我々は山登りのことを真剣に考へてはいるが、結局は生活の餘技である。生きるためつて敗れた人達でさえ餘りかえりみられない昨今、これほどの御力添えを頂き、感謝の言葉も見出せない程である。

圖書紹介

村井米子著

旅心旅情

今回圖らずも私が皆様の御推薦により、光輝ある日本山岳會の會長に就任することになり、適任でないことを甚だ惧れるのであるけれど、皆様の御援助、御協力によつて、その任を全うしたいと考えている。

この際私が日本山岳會に入會した當時のことを追想して見たい。元來私が登山といふことに對して眼が開かれたのは學生生活の終りに近い一九一三年の夏、病後の静養に那須の北温泉に滞在している間、三本槍岳に登つた時に端を發している。その後登山熱が急速に高まつたのであるけれど、當時東大には山岳部もなし、唯一の參考資料は「山岳」だけであつた。その「山岳」の發行が不定期で

あつて、手に入れるのに中々苦心したものであつた。

偶々一九一八年秋、本多光太郎博士の鐵の磁性に關する講演會が鐵道會館で開催された時、會員の故山口成二君とあい、同君に紹介を依頼して入會の機を得たので、多分今一人の紹介者は山口君を通じて木暮さんを煩

近の旅、故辻村伊助氏のスウィス日記に導かれ、且横氏に紹介されたブラヴァント氏等と共に、行つた夏と冬のベルナーオーパーランドの山行、第二次大戰直前に山口兄弟、高木氏と同行したアロラからツェルマツトに至るスキー行何れも私にとつては輝かしい憶出である。

今や日本山岳會は對外的にはヒマラヤに登攀隊を派遣し、また對内的には國體の登山部門を引受けているので誠に内外多事と云うべきで、私が昔憧れて入會した當時の日本山岳會とはその性格も著しく異つて來ている。

あれを思い、これを考へひとえに會員諸君の御援助、御協力を御願ひしたい次第である。

それにしても、よく歩き、よく登り、よく勉強している著者の愛らぬ情熱は敬服に価する。これは著者の第三の隨筆集だが、以上の点から第四集に期待をかけておこる。

(TK)

B6二一七頁 写真四葉

二〇〇円 明玄書房

戦後最初の アムネ・マチン探検

II

吉沢一郎

前回に引續いていよいよ本題に入って行く譯であるが、まず戦後最初（一九四九年）にアムネ・マチンについて、『The Marching Wind』という本を書いたレオナード・クラーク陸軍大佐について一言しておこう。

悉しいことは知らないが、著書のジャケットの裏に書いてあるところを見ると、その氣質、鍛錬、経験という三つの要件からいって彼クラークは、個人的な創意と冒險心という偉大な古典的傳統の中に生きた、少數現存の探検家の中の、特異な一人ということが出来るようである。

その好奇心や冒險心が、彼を惹きつけた場所を一つの表にしてみると、次のようになり、宛も地名辭典に接するようないがするものである。——セレベス、フィリッピン、スマトラ、マレイ、シナ、チベット、蒙古、セイロン、インド、メキシコ、ユカタン、北アフ

リカ、北ビルマ、シナ・トルキスタン、アマゾン流域……。

彼は第二次大戦中、アメリカ情報局に勤務、シナ大陸において、日本軍の後方擾亂に従事、その功によって米本國に呼び戻され内地勤務を命ぜられた。

彼は第二番目の著書である『The Rivers Ran East』（出版社及び價格前記と同じ、ペルーの大森林グラン・パホナルを通り、瀾流を東に下つた旅行記）によつて、探検記の筆者としての地歩を確固たるものにしたが、今回この『進み行く風』を著わし尚四番目のものも目下進行中であるという……。

次に彼がこの書を著わすに至つた動機について、その序文に書いてあるところから簡単に御紹介しておこう。

「私はこゝで、或は盲蛇におじずといわれる無鐵砲を敢えて行くかも知れない。勿論總ての人が私の測つたアムネ・マチン連山の高度に同意するとは思っていない。私が一九四九年の『ライフ』の十月號に發表した簡単な記述に對しては、多くの批判があり、世論は來國戰術のように私に近く迫つて來た。然しプリンス・ドルジェとソロモン・マと私は、多くの探検家その他によつて、エベレストに拮抗する山として報道されていたアムネ・マチン峰の存在を實證した。私は尚これについては他の遠征隊が同じ場所へ出掛けていって私の信じていることを再確認して貰いたいと思つてゐる。……」

本書の資料は、チベット遠征が完了した後に、中共軍によつて占領された蘭州に置いてあつて、而も焼失を免れた野外記録、寫眞及び手紙、並びに私個人の記憶などからなつてゐるが、私はそれ等を出る限り正確なものとしたり積りである。

野外資料の照合は關係地域における重要地點を中共軍が占領してしまつたので、殆んど不可能となつた。……

本書は學者や専門家のために書かれたものではなく、將來アムネ・マチン山群に入り込み、私達や先驅者達によつてなされた發見物を、確認乃至は論駁しようとする青年のために特に書かれたものである。……

登山家或は學識者の中には私に疑いの目を向け、この主張されたチベットへの遠征、特にアムネ・マチンへのそれを信じないものがおり、又、寫眞中の雪線の高さよりして發表された高度を否定している向きもある。

最近出版された權威ある山の本（『The Story of Mountains』 by F.C. Laue）には、私がトラツクに乗つてアムネ・マチンまで行つたとか、その他色々間違つたことが書かれては、又、私の行動については（職掌柄）種々の憶測が行われていたようである。がそれらは總て誤りである。その中の一例をあげるとこんなのがあつた。即ち私はアメリカのために、中央アジアにおける共產主義者の活動を阻害し、シベリア及びロシアへの地下工作を開始したのであると。……

私は最初の旅行記を書く積りは全然なかつた。然しそうした噂さが段々と擴がり収集がつかなくなつて來たので、こゝに在りの儘の全部を披露し、「神秘」とその上に多くの人々が持つてゐると思われ本當の「憎惡」を取り去ろうと決心した。

私が、アメリカ政府としては何も知らないことであるが、私の遠征の後援者となつた馬步芳將軍に對し、中央アジアの統制のために中共軍、特に林彪との闘いに多少の援助をしたということは事實である。然しそれは、アメリカの一市民として私の責任において、私が勝手にやつたことである。……

私の測量係であつたドルジェが使つた器具には秒間目盛がなかつたこと、ライフに發表されたアメリカ地質調査所の結論によつてドルジェがチベットで測つたアムネ・マチンの高度、二九六六一呎（九〇四・一米）には上下に二五〇呎（七六・二米）の誤差の可能性が認められる。従つてアムネ・マチンの高度は三二一六一呎（九八〇・三米）と二七六一呎（八二七・九米）を兩極端としたもの間にあるように思われる。

前記の三角測量は、現地で一四九五年五月六日に行われたものであつて、基線（Base Line）の長さは一〇〇〇米、その高度三八六〇米、アムネ・マチン頂上南端との比高四六・一六米、それに器具の修正値五・五五米、この三つの要素の和が九〇四・一米となつた譯である。——これについての詳細は本書の XIV 頁及び一八一頁を参照のこと。

アメリカから西寧へ

「時は一九四八年、再び遠征への機は熟した。家に充分長く滞在してゐたようだ。私の心の中では行き先は決つてゐた。文明世界から遠く離れ、入國を固く拒んでゐる世界最高の臺地チベットへ……こんな風にクラークはその旅行記の書き出しを書いている。

資料による調査はサン・フランシスコの公立圖書館で行われた。矢張りロックの「神秘の山を求めて」が最も参考になつた。

金は少ししかない。「太平洋・東洋航路會社」のヴィルジャ號に乗る切符を買つてしまつたら手許には一二〇〇弗しか残つてゐなかつた。これで遠征に要する全費用と、歸への交通費を賄ねばならない。だが金の不足で仕事の可能性を考える人は視野が狭いといわなければならない。

一九四九年一月十三日、ヴィルジャ號は無事サン・フランシスコ灣を出て行つた。マニラによつて香港についたのは二月の五日であつた。

廣東その他を飛び廻りやつとヴィザを手に入れた。國民黨と中共軍との闘いで上を下への騒ぎをやつてゐる時に、何のための奥地入りかと多くの人は半ば呆れた面持ちであつた。

CNACで二月十一日午前七時香港飛行場を出發、同日午後五時重慶着、二月十八日、軍用機で同地發、午後四時遂に蘭州の地を踏んだ。こゝには三十人許りのドイツ人牧師がいた。この遠征の主役の一人、ドルジェ（Prince Tse）

せたのもこゝである。彼については一言述べておかなければならぬ。

彼はトルグート蒙古族の一人で蒙古人は彼のことをツァーガン・ヤッヤ (Tsagan Yasse, 白く骨即ち第一級の貴族) と呼んでいたたその妹は北京のフランス領事夫人で、トルグートの内親王ブレアル (Bréal) と云々。

ドルジェはデンマークの有名な探検家ハスルンド (Henning Harslund) の親友であつたが、ハスルンドは最近チベットへ入ろうとして殺害されたということである。欧州で教育をうけドイツ、フランス、ロシア、蒙古、シナ、ラテ

ン、ギリシャ、英語等の各國語を自由に語り、書き、その上、中央アジアの澤山の土語を喋る語學の天才であり北京のトゥリン大學で教授をしていたが、中共軍の北上によって同地を亡命し、蘭州に來てドイツ人神父達のため通譯をしていた。

中日事變中は國民黨の地下工作隊として蒙古におり、クラークはドルジエを知らなくてもドルジエはクラークを知つていたという因縁があつた。

クラークは尚、蘭州近郊の新村でスウェーデンの商人 G・E・ゼーデルボム (Gustav E. Söderbom) にあつてゐる。その兄 George は蒙古及び新疆省でのヘディンの右腕としてわれわれにも親しい(本腕の上で)人であるが、クラークはこのゲオルゲを戦争中に救い出したことがあるという。

このグスタフの家で會つたアメ

リカ人のオールマン判事とグスタフの二人が、西寧にいて百萬の歩兵をもつて中共軍と闘つてゐた馬歩芳に、紹介狀を出してくれたのである。それには計畫の大要と馬の公許及び援助の要請がしたゝめられてあつた。

蘭州にいる神父の中には、フイルヒナー中尉に會つた人もあり、古い旅行記の數々を貸してくれたり又、中尉のつくつた貴重な地圖の一つを貸してもくれた。

斯くて多忙な二週間が過ぎた時馬將軍から至急西寧に來るようという傳言が廣らされて來、一九四九年三月五日（土曜日）クラーク等を乗せた郵便トラックはいよいよ西方へと向つたのである。

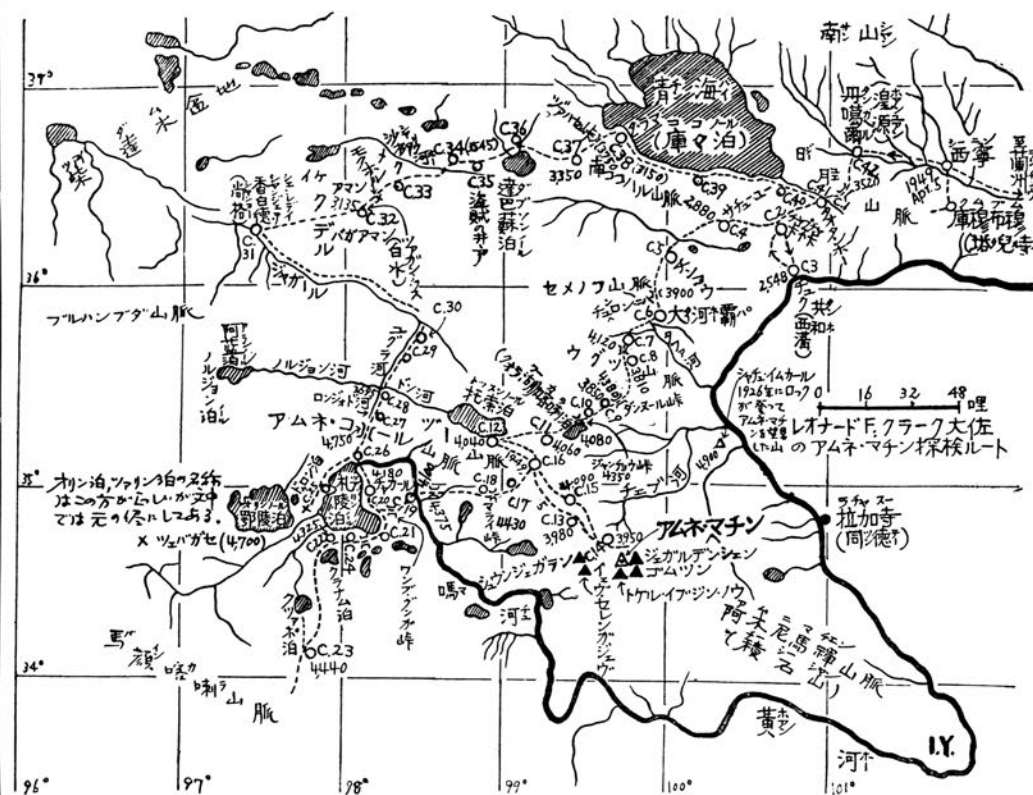
馬芳芳とはその本營で會見したが、最も印象的な風貌の持ち主で、年の頃は約五十歳、その長い鬚は黒絹のようであり、その態度には一分の隙もなく、而も温かに感動さをもつていた。微かに浮んでゐた笑みとは對照的に、人を射るような眼は、ドルジエを通じて話しかけたクラークの眼から一瞬の間も離れることがなかつた。この彼とその有力な父がチベットへ入ろうとした多くの探險家を阻止したのである。

後、言葉を充分に注意しながら短刀直入に本問に入り、中共軍の最優秀部隊である林彪軍に壓倒された場合、その退路の研究と確保の必要なこと、食糧事情の調査、草河上流の地圖の作成、又チベットの北部でも反共戦争を繼續出来ること等を説いた。

地域において、生殺興奮の權を握る絶對的な獨裁者であり、いくら重要なことでも會議や相談を好まず、且決斷の人でもあつた。

馬はクラークの申出を承知した。食糧も護衛兵も科學者も全部用意するから行つて貰うということになり、當分準備の出来るまで西貢

黄 河 源 流 概 念 图





一 会員の提言

月君が新目標の簡単な解説を試みている。一七四號には堀田隊長が紛争に困り抜いた挙句、漸く新目標へ向うことになりホッとした報告を現地から寄せているが、遠征隊はガ

一九五三年のエヴェレスト、ナガバルバット、一九五四年はK2にチョー・オユー、そして本年はカンチエンジュンガにマカルーと巨峰の頂上が相次いで登られたのは吾々にとつて快報に違いないが、それにつけても念頭に浮ぶのはマナスル遠征の経緯である。

一九五三年三田隊の業績は昨春「マナスル」一巻として刊行されたので、一九五二年の踏査隊の報告と共に、その全貌を知ることが出来るが、昨一九五四年堀田隊の行動成果については當時の新聞切抜きでも保存していないことには、いまこれをトレースする手掛りさえない。

試みに會報を繰つてみると、一九五四年一月十三日に隊員が決定し(一七二號)、一月二十六日に歡送會があり、堀田隊長の「偉大なる経験の蓄積」といふ出發の辭と、當時の會長横氏の「登山隊編成事情」が一七二號に載り、同じ號に松田雄一君の「先發隊より」の通信があるが、何名の先發隊が何時出發し、本隊は何時出發したかは會報誌上では知る由もない。遠征隊が印度へ上陸以後の行動については一七三號にカトマンズ出發後四日目迄の谷口君の旅信とガネシュ・ヒマールへの目標變更について横會長の一文、それに望

マナスル遠征隊は日本山岳會主催だつた筈だがと考えてみるが、どうにもならない。

昨年八月十七日の登山隊歡迎報告會、其後開かれたヒマラヤ研究會(一七五號)に全國に散在するJAC會員の内何人が出席したか知らないが、それらの人々以外に會の仕事に會員に報告する役目を持つ會報誌上では、ガネシュ・ヒマールでどうしたのかも識ることが出来ないものである。支援を送り期待をもつた會員が物足りなく思つたとしても無理はなからう。ヒマラヤに遠征して、苦しみも楽しみも喜びも體驗して、苦しみも楽しみも分達の仲間、或は自分一人の心にそれらのものを獨占することなく會員にこれを傳へ、つづつての勢をとるべきだとおもうのである。

前年遠征隊を送つた同じ山へ翌年出かけて行つたら、麓の部落へ入るのを拒まれるという、ヒマラ

ヤ遠征史上稀有のケースにぶつかつたのは全く残念至極であるが、さて其後の経過は？ 會報の會務報告を辿ると昨年十月十三日「資金の見透しさえつければ本年のサマ問題の解決の件も含めて再舉遠征隊の派遣を期したい(一七六號)」とあり、十一月には一九五五年マナスル登山隊長決定に關する件と隊長選衡方法に關する件とが審議され、資金の見透しがつき、隊長も決定したのかと思

圖書紹介

星と嵐

レビュファ著
近藤 等譯

六つの北壁登行というサブタイトルがついていようようにグラント・ジョラス北壁(一九四五年ウオ

カーバットレス、一九四七年中央バットレス)ピッツ・パディレ北壁(一九四九年)ドリユ北壁(一九四六年)マッターホルン北壁(一九四九年)チャ・グランデ・ディ・ラヴアレド北壁(一九五二年)アイガー北壁(一九五二年)の登攀を物語つたものである。しかし単なる固苦しい報告書ではなくアルプスにおける最も困難な登攀を通じて山と人との結びつきの美しさをたたえた青春の書でありそこにこの本が昨年度フランス山岳文學大賞をかねた理由がうなずけるのである。いいかえれば岩登りの一それも尋常一様のものではない極度にむずかしいものの中にひそむ魅力を甘美な詩にうたつた

はれるが、會員には具體的なことは何も分らない(一七七號)。本年に入つて一月三十一日ネパール外務省より「……何時頃出發するか通知ありたし」の公文書到達。取りあへず當方の現狀を報告しておいた(一七八號)とあるが、ネパール政府では報告されても會員に報告されないのはどういう譯である。會員總會でこの邊の事情の説明があつたかも知れないが、總會に出席するのは總會員の二割

ものともいへよう。著者は一九五〇年のアンナプルナにおけるフランス遠征隊の一員として最高キャンプで活躍したことはまだ耳新しいが、ガイドの手になつた作品がこのように優れたものであるといふのもまたわれわれには目新しいことである。

かの有名なマッターホルンの北壁が、特徴あるスラブやチムニーなど何一つない傾斜の非常にきつた廣大な斜面にルートを遊びながらさすらい登るだけであり、ハーゲンもよくきかない凍結した岩の中に溺れるようなめまいと不思議な魅力にとらわれるというあたり、また氷はガラスのようであり、確保地点もがく断えず岩雪崩に襲われ、安全に登れる日は一年のうち僅か数日に過ぎないにもかかわらず、一九三一年シュミット兄弟の初登攀以来四回も五回も登られているというところなど興味深い。アイガー北壁の登攀については時を同じくして明文堂から出た「アルプスの三つの壁」(ヘックマイヤー著、長越茂雄譯)にもく

にも満たないのだから、やはり會報を利用すべきである。さういふうちに去る四月の役員總會で、「ネパール政府に對し本年度登山隊の派遣は準備十分の爲中止の旨を打電し、近く現地事情の確認と來年度登山許可の留保方を交渉のため西郷、成瀬兩氏をネパールに派遣のことになつた。右費用は毎日新聞社より支出されることに決定された(一七九號)」

わしいが、これらの登攀の真相を知る上においても一讀に價する。戦後歐洲における一流の連中がどんな山登りをやつてゐるかを知らず得るのも一つの收穫で、レビュファのアイガー北壁行では二名のオーストリア隊と合流して登つてゐるのだが、その一人はナングガルバットを陥落させたブルルであり、一人は昨年チョー・オユーを極めたヨッヘラーであり、こうした登山方法を直接ヒマラヤまで延長させている彼等のエネルギー的な態度は日本の登山界にも一つの問題を提示するだろう。しかし一方こうしたアクロバティックな岩壁行は一人も英國の登山者の名前が見えていないといふことは、にも拘らず英國の登山者たちはヒマラヤにおいてドイツ、フランス、オーストリアなどの登山者に決してひけを取らない實績を残していること、「星と嵐」を読んで私は色々と考えることが多かつた。挿入の多くの記録寫真も壓巻(白水社刊、定價五百圓、一八五頁)

山崎 安治

會員が會報上で知り得るのは以上のやうなものだが、これだけで昨秋以來の計畫がいかに進み、いかにして準備が不十分になり中止されたのかは分り難い。會報だけでJACCの動きを知る會員もあることはいうまでもなからう。

☆

西堀、城瀬二人の特使は恐らく十分にその使命を果して歸國されたこととおもう。來年度の登山許可は素より、サマの紛争の真相も判明したことであろうし、その解決も付いたに違いない。その報告が會報誌上に現われるのも遠くないとおもうが、さて來年登山隊を繰出せるとなると、何から先きの手を着けるべきか？

この點で參考になり、標準となるのはエヴェレストのハント隊の組織準備であらう。八八四〇米の山と八一二五米の山とは違ふかも知れないが、ヒマラヤの巨峯への遠征隊に根本的な差があらうともおもわれない。

ハント隊については會報一七六號に「立派な遠征隊」と題して拙文を書いたので、こゝにまた繰返すことを避け要點だけを摘記するにとどめたい。

第一に遠征隊長が決定任命される。ハントの場合は前年の九月十一日に任命されている。隊長が後方のキャンプで指揮をとるのでなく、「最高キャンプを自分の重大な責任と考えるよう」にとロングスタッフに言われる、これを實踐出来る體力を持っていたのは注目すべき點である。彼は四十二歳であつた。最近のヒマラヤ遠征隊の隊長はアンナプルナのエルツォーグ

四十歳、カンチのエヴァンス三十
六歳、マカルーのジャン・フラン
コ四十歳と大體四十前後までの年
令で、ブルース、ラットレッツ時
代と大きく變つてゐる。

日本山岳會も四十前後まで、ヒマラヤの經驗を持つ會員を既に幾人か持つてゐるのだから、候補者には事缺くまい。

隊員は隊長が人選すること、ハント隊と同じように全国に會員をもつ。たゞこの場合、全國に會員をもつ日本山岳會の遠征隊らしい顔觸れを選んで欲しい。外國の遠征隊では印度やネパールで初めて顔觸れを合わせるような隊員の選ばれてゐる場合が少なくない。それを旨く統率して行くのが隊長の役目でもあるのだから、顔見知りや、親分子弟のやうな關係で隊員を選ばないやうにしたい。

隊員の選衡に當つては、ハントのいう「チームの全體がサミッター」の方針を採るべきであらう。エウレストでは第六キヤンプで行つて初めてサミッターが決定されているのだ。今年のマカルーでは天候にも恵まれたのであらうが隊長以下全員登頂したと傳へられる。マナスルへ全員登頂の機会はないと言へない。マナスル

りも大分高い。マカルーでさえ可能だったのだから。ハント隊のように十一月一日まで、遠征に關する一切が隊長、中心に動くという方針、これはエグゼルスに通用したのだから、マナスルに通用したのだから。そして、J・A・Cの中だけでも、みんなが隊長を助けて、強力な登山隊を送り出せば、来年こそはマナスル登頂の懸案も解決するに違いない。(七月七日)

藤島 敏男

山なみ（隨筆集）

「山日記」の豫告版とでもいうようなパンフレットが四年ほど前から出ているが、一昨年の秋に出た一九五四年版のパンフレットの巻末を見ると、「山の幸」という題名の随筆集が昨年初頭には發賣される旨の廣告が出ている。それが「山なみ」と變つてようやく去る六月に刊行されたのだから編集から出版までには相當に永い月日がかゝつた本といえよう。なるほ

たしているのも遺憾のひとつ。或る知人から「讀者と製作者との糸がポツンと切れているのを感じた」と云つて來たのは同感である。寫眞のことを云々する資格は私にはないが、挿入寫眞は大部分餘り興味がひかれなかつた。またその多くが朝比奈氏一人の手になるもの少々片よりすぎてはいまいか。マナスル書にふさわしいものもつと本屋にふさわしい寫眞があつた筈と思うのだが。圖版の中では巻頭の坂本さんの繪がいちばんよいと思う。

アンソロジーの性質上内容について云々するの私にとかく個人的趣向に走るが、私にとっては松方、田邊、坂本氏らのものが特に印象に残った。しかし一番私の注意をひいたことは、今どきこうした儲け仕事にならない出版を引きうけてくれる仁がいるということである。茗溪堂主坂本氏は戦争直後の苦しい時代から「山日記」の出版を引きうけてくれた、われわれにとつて忘れられない人だから、わかれ氏を知る者にとつては不思議ではないにしても、このことは特記しておく値打ちが十分あるだろう。

變A5型二八〇頁 四八〇圖
一九五五・六月 茗溪堂發行
編者代表 朝比奈菊雄

小林國夫著
日本アルプスの自然

日本のグリンデルゲルトといわれる松本の町で地質學を研究する著者はこの書において、いままでの自然科學書のおおきなさを打ち破つて、だれにでも親しめる本にしようと努力した跡がうかがえる。

とかく、地質學は一般の登山家にわかりやすく説明できないのが、難點であり、その意味でも從來この方面の著作がすくなかつたわけだが、山を愛する情熱からこの學問をえらんだ著者だけあつて、さすがにわかりやすく表現することに成功している點は買つてよい。

だから、「山を愛する心」から語られはじめ、エーデルワイスにまつわる挿話や、高山の氣象などを説明しながら、結局は水の本質を説いたのだが、この書の核心はなんといつても、この日本アルプスにおける「氷河周邊地形」に関する氏の研究であらう。

豊富なアートの使用の山岳地形寫眞は今までの山岳専門書になかつた充實さをみせている。これは出版社の誠實さと理解によるものであらうが、こうした自然科学書がこれから、登山の各方面にわたつて出版されれば、登山家たちの素養と知識はどんどん向上するのではなからうか。徒らに登山記のみに書庫につむことが近代的なセンスとはいえない。　　〓 KO 〓

(築地書館發行。六五〇圓。
アート寫眞八四葉。函入)



会 員 通 信

新村橋の開橋式

諏訪田栄蔵
堀本徳次郎

故・新村正一君（會員番號三二四一）は衆知の通り、昨廿九年九月十日市川市外に於て交通事故のため急逝したが、君が生前から架橋に努力していた徳澤から奥又白谷へ通ずる梓川の吊橋が、このたび長野県當局、特に觀光課長下平廣恵氏、秋山正人氏、上條進氏、その他友人有志の盡力によつて見事に完成した。

新しい吊橋は、故人の遺志を傳えるために新村橋と命名された。徳澤から上流へ約十分、五万分の一地形圖の上高地國有林の林の下にかけられた。全長約八〇米の鐵線橋である。

これによつて奥又白谷・中又白谷・横尾谷・潤澤への最短・最良コースが完全に完成した。橋のたもとに岩には、この橋の由來を語る銅板もつけられる。

上高地の新名所として、正ちやんの名とともに、岳人に親しまれるだろう。ここからの奥又白を望

む正ちやんの魂は、われわれが、去ることが出来たように、離れずに、アルビニストを守つてくれるだろう。

七月三日、東西の知友四〇人が集つて、折からの快晴に恵まれて渡り初式を行い、徳澤園でさうやかな祝宴を張つた。

「オツさん、出来たよ」私どもはこう言いたい。倅せん男である。

男火山・女火山

村上 金吾
太田 広

釜石線上有住（かみありす）駅で陸前高田行國鐵バスに乘換える。十文字で下車、道のそばの農家で男火（おんび）女火（めんび）への道をきくと、生憎山を知つてゐるという主人が留守だつたが、途中の牧場までいつたところある女達が詳しく道を教えてくれた。トラックの通る廣い道路を西の方へ五〇〇米ばかり行くと、右の方の川に橋があるがそれを渡らずに、道場の小さな地蔵様の石碑のあるところから左に山道にはいる。馬に松丸太を引かせてくる人達に逢う。やがて左下に新しい道路が見えてきて合流する。これがさつき女達が下有住までいつてから登れば間違ひはないといつた道路らしい。

この一帯は牧場が草刈場のようで立木はない。道のはとりにほところどころカヤで作つた小屋がある。それを目あてにして歩いててもよさうだ。道路が右の澤に沿うてはいりすぎるので向いの尾根にとりつき、道のないところをのぼる。日が照

つてきてかなり暑い。しかしまもなく峯通りの道に出る。その道をすこし右の方へ行つて前方を見ると、前に深い澤があつてその向うに高い山が二つ立っている。それが男火、女火ではないかと思つたが、なお附近の高地へ登つて見ると、いままで山のかげになつていた右前方にまぎれもない女火、男火が見えた。

道の下には例のカヤぶきの小屋があつてリヤカーなどが置きすてあるのを見ると、村の人達がここらにきて草を刈つたり牛馬の放牧を看守したりするものと見える。高みを右に見、つぎに左に見て行くと、道はあまり高低がなく歩きよいし、展望はすばらしい。その日は四方に山の焼ける煙が見えた。

女火山の南面中腹を横に道が通つてゐるがその下方がもの凄いがレで人など通れそうもない。その中央よりもすこし上にポツカリ口をあけた洞窟が見える。それを左に見ながらいよいよ女火の登りにかかる。そこで私達は一休みして畫飯にした。道はあるがどこを歩いてもよい。頂上近くなると右下の林の中に雪がしばしば残つてゐる。その上部が美しい枯芝の斜面でローススキーでもしたいところである。

女火山頂上一一四四五分、三等三角點がある。愛染、五葉、永上室根、栗駒、焼石、岩手、早池峯六角根、片葉、仙磐など三六〇度の山岳展望をほしきままにすることが出来る。北々西には男火山が指呼の間にある。女火をおりて男火との間の高原

をのんびり歩いて行くと、いつの間にか男火ののぼりになる。左下の谷間に滝が見え、その上方に牧場の看守小屋らしい建物が見える東北とはいへ五月も近いのにそこちに残雪が多い。

男火山頂上一二時七分、空もさつきほど晴れておらず風も寒い。屋望は相變らずよいが歸りを急がねばならない。最初の豫定通り上郷（かみごう）へ出ることにして男火の北面をおりてゆくと、しばらく高原がつづく。地圖をたよりに羽越川と來内（らいない）川の流域の分水尾根をおりて行くと、遙か下方來内川源流の谷間に小屋が見え、人や馬が見える。おりて行くと薪を荷馬車で搬出する人達だつた。そこは大股というところ。砂子澤橋を渡つて右側に木炭小屋のあるところが砂子澤でいま人家はない。つぎの三平屋敷は一軒家で部落最奥の人家である。横懸、三國、鬼原、神樂田と來内川に沿うて二、三軒ずつの部落がつづく。田はほんの僅かばかり、山にはベニヤマザクラが美しい。

権現という部落に出ると學校もある。伊豆神社の入口に早池峯（はやいけのね）はやちね山開祖姑閑藤藏碑がある。そこから山道を越すと繁部落、県道を横ぎつて行くとまもなく釜石線岩手上郷驛で午後四時一〇分着。この日一行は宇津木龍男氏を加えて三名。歩程七時間三〇分。

高頭翁建碑除幕式に参列して

金山 淳司

高頭仁兵衛先生の徳を讃えた石碑の除幕式が六月九日に舉行されましたので急ぎ報告致します。

先生の建碑の話は數年前より深才村々民の間で起つてゐたが機が熟せず、たま／＼昨年五月深才村が長岡市と合併するに及び急速に實行に移されたのでありました。建碑の實行委員は、先生の壽像が既に山岳關係者の手で彌彦山に建てられてゐるので、郷土の産業・經濟・文化・教育の發展に盡された面より、學区民の先生を敬慕する情熱のみで建設しようと計畫され、敢えて山岳關係者には呼びかけなかつた由です。それで石碑の裏面には「深澤學區民三一五建之」と刻んであるのです。

場所は深澤驛前の十字路角の農協倉庫の西隣長岡・小國間のバス道路に面して百坪程の土地、昔最明寺時頼がそこに休んで里人に土地の利害を訊ね、その請に應じて苗字を與へた處と言われる正面六間、奥行四間、高さ四尺位の数字の上で、石碑は高さ十三尺、巾六尺、厚さ九寸の仙臺石、苗場山麓から運んだ二尺二寸長さ九尺の苗場御影石の臺石の上に建てられ、大きくて立派なものです。碑の表面は「凡翁高頭仁兵衛氏之碑」と石黒忠篤氏の筆で深々と彫つてあります。氏は同郷の出で、氏の御尊父と先生の御尊父とは竹馬の友でいられたので、先生の御希望により石黒忠篤氏にお願いされたのです。除幕式當日は朝の曇りが後に晴上り「土産に持つて」行かれる越後三山がこの場所から眺めますと、丁度同じ高さで、しかも同じ間隔を置いて列んで遠く白く輝いています。参列者は内山長岡市長等名士百名程、その中へたまに東京から所用で長岡へ來られ

(8頁より)
た會員佐藤久一郎氏も私等と参列されました。

式は十一時十五分、一發の花火と共に初められ、先生の御孫詰子さんにより除幕されました。それから式次通り進み、後の祝賀會も盛大であつたことは、これも先生の徳の然らしむる所でありました。唯残念だつたことは先生の病未だ快癒されず、折角の除幕式にも参列相叶わなかつたこととあります。一日も早く御回復されますよう折上げる次第です。

歸途もう一度よく石碑を視ますと、盛土のようになつてゐる苗字塚の兩端に茂つてゐる大きな樅二本と栗の木が初夏の太陽を遮つて石碑を覆つてゐます。どうした譯か私はこの時、昨年大湯温泉へ御案内したお元氣の時の先生のツル／＼頭の寫眞を思い浮べたのです。あの時の五月初めの強い直射日光にさらされた先生の頭痛を私なりに心配したのですが、それを今ここに思い出した様でした。何れにせよ、あの茂つた樹木は石碑とよく調和して、先生の人格を一層大きく浮び上らせてゐると思われま

ウエストン祭報告

辰沼 廣吉

七月九日信濃支部主催のウエストン祭に本部より石原監事、辰沼理事、支部より坂倉理事参加、午後四時信濃支部長高山氏の挨拶に始まり石原監事のウエストン師紹介、安曇村村長代理立花茂氏、松本市観光課長新村晟三氏の挨拶、

引き續き講演會として辰沼、坂倉横内氏の話、横内氏はウズムシについて興味ある繁殖の長い間つみあげた研究成果を説明、夕食後の座談會では繁華となつた現在の高山地と其の將來についてのことなどが話題の中心となる。支部ではこの御祭も毎年の行事として豫算其の他で仲々御苦勞の様に推察されるが、地味なものとしていつまでも存續してゆきたいと希望を持つていられる。翌十日は西穂と大瀧へ二隊に別れて出發、無事終了した。



信濃支部から

ウエストン祭、學術登山と並んで支部の三六六年間行事である縣下の高校山岳部及び、一般團體を對象としての技術講習會も既に六年七回を経て來た。これは今年になつて行われた技術講習會の報告である。

積雪期登山技術講習會

三月十九・二十・二十一日、妙高山に於て長野縣教育委員會と共催。委員十三名、他に本部より折井、沼倉兩氏特別参加、受講者二十六名。

▼十九日(晴) 赤倉スポーツハウスで受付、同所へ一泊。夜は登山の注意、地圖の見方、天氣圖の作り方の講義。

▼二十日(曇後雨) 開講式の後、八時三十分出發、スキーで觀光ホテル裏より前山へのルートに登

る。南西風のため氣温上昇しザラメ雪となつてゐる。十四時、森林内にスキーデポし、ワカンにて登高。途中デブリが澤山出ていて雪崩の心配をする。十五時、大谷小屋に到着。附近に幕營。一晚中雨が止まな。

▼二十一日(雨後曇) 八時にアイゼンを着けて出發、天狗堂の稜線傳いに登る。受講者の中には夜中降り續いた雨と風のため疲勞の色が見える者がいる。パーティの組み方、アイステクニックの説明を行いつつ十時頂上に立つ。雨と霧のため視界が全くきかず、すぐ下山にかかる。頂上は百米位の所でアイステクニックの訓練を行う。

十一時、テントに歸着。テントの撤收を行い十二時半下りになり、一氣にスキーデポまで下り、それより思い通りに觀光ホテルへ。十五時着。十五時半、三叉路で閉講式を行う。

二日とも雨のため十分な講習は出来なかつたが、その反面非常によい體驗となつた。本部より参加された折井、沼倉兩氏及び色々便宜を計つて下さつた越後支部の方々にお禮申し上げる。

夏山登山基礎技術講習會

五月一・二・三・四日

穂高岳山岳川谷を中心として委員九名受講者三十一名

▼五月一日(雨後雪) 九時、島々集合。十二時坂巻にてバスをおろす。ここより雨が雪と變る。十六時上高地に着き小梨平に幕營。

▼五月二日(快晴) 八時出發、十時三十分、水飲澤出合に。各澤は昨日の降雪がデブリとなつて出ている。奥明神澤下股下部にて雪溪

技術の説明、後、重太郎新道に取付く。尾根も一面に雪がついており、それがくさつていて、アイゼンが伸々きかない。それと急坂とに意外に時間をとり二六〇〇米地點に着いたのが十三時半。行動の敏速を計るため二班に分け、A班は前穂頂上へ、B班はこ

より引返と決定。A班は十四時四十五分前穂に登頂、奥明神澤を雪溪技術の訓練をしながら下り、十八時小梨平着。B班は重太郎新道を下り、明神澤下股下部で一時間半程雪溪技術訓練を行い十六時三十分小梨平に歸着。

▼五月三日(曇後雨) 八時出發。一隊五名は玄文澤を登り西穂高頂上十二時着、十五時歸着。

本隊は天狗澤よりジャンダルムの登高を目的として出發したが、岳川のガラ場取付の處で雨が降つて來たので、豫定を變更して西穂高澤下澤に入り、岩登りの基本事項の説明及び雪溪技術訓練を行い十二時、一九〇〇米地點より引返す。下山の途中雪溪技術訓練中、受講者一名が足を捻挫して歩行不可能となる。半数の委員が搬出を行い、他は十五時上高地へ歸着。十六時迄ザイルの使用法の講習及び、テントの後始末を行う。負傷者搬出班は十七時、無事到着。

(尚負傷者は翌日歩ける様になつた。)夜は西糸屋で、十九日より二二時迄夏山登山の注意、合宿の方法、遭難対策及び裝備についての講習を行い西糸屋泊。

▼五月四日(雨) 九時閉講式を行い解散。夏山の講習會には時期的に早すぎたが、休暇等の關係のために以

上の期日で行つた。特に高校山岳部の部長の先生方が多数受講された事は遭難対策が學校當局に於て眞切に採り上げられて來た現れとして喜びに耐えない。(大木記)

理事 退任

卅年度から初見一雄、舟橋明賢の兩氏が退任しました。長らく會のため盡されたことに對し感謝の意を表します。

カワミヤのアルパインソール

耐久・不磨耗・滑止

あらゆる点で NO 1

合資会社 代表 平林三郎

カワミヤ靴店

東京都大田区大森 8~3740

TEL (76) 5882



學生部について

辰沼 廣吉

(とき) 六月廿七日
(ところ) 體協會議室

出席者 辰沼、山田、大塚、羽鳥、村木、松澤、北村、増田、神島以上役員及び委員、その他十九校四十九名、OB十四名。

議題①本年度委員紹介
②辰沼擔當理事より本年度の方針について

A 學生諸君の最良の成長を望む

B 山岳部の性格と日本の岳界への役割と、存在の意義

C 學生部の仕事とは、知識の交換と相互の親睦にその意義を見出すと共に、お互いになやみを話し合う機会を持つ事が大切である。

D 具體案

一、部員と接觸の多いOBを含めての會

二、懇談會、具體的に各校の特色を生かし權威ある研究發表を行う。

E 其の他の希望計畫

一、避難対策に關し委員會を組織し發足したい。

二、醫學グループの集りを持つて身體検査及び現地の治療について打合せる。

三、各支部の學生部との連絡を持ちたい。

F 各校夏山スケジュール發表

發表後次の様ないくつかの問題を残す。A正課体育実技と山岳部の關係、B新人の養成方法、C縦走形式と合宿形式

の相違、C高校と大學との關係等

文部省主催の青少年野外旅行運動

文部省は次の様な趣旨のもとに全國的に野外旅行運動を計畫した。「新しい次代の青少年は、郷土愛と祖國愛に裏付けされた正しい世界觀のもとに、高い理想に向つて邁進してゆくたくましい體力と強固な意志を持ち、明るい希望にあふれた青少年として育てられねばならぬ。然るに我が國社會の現状は極めて不安定であり、社會惡に充されており、これが感受性の強い青少年に敏感に反映し、類發的虛無的な風潮を助長し幾多の由々しい問題を提起している。従つてこれを解決するためには、國及び公共團體はもとより、關係民間團體は相協力して社會環境を整え、と共に、青少年のための健全な活動の場を提供する必要がある。このために、青少年に休暇を利用する野外旅行を奨励し、大自然の中に若い生命の躍動を感得する機会を與え、自然生活の體驗を通じて綿密、周到な計畫性、慎重な決断力、不屈の實踐力、困苦欠乏にたえる忍耐力、旺盛な創造力を體得し、郷土を愛する精神を養ひ、社會正義の自覺を高める等、新しい日本の建設のために有爲な青少年の育成に資せんとするのである」この趣旨のもとに方法、組織、具體的運営を細部にわたり計畫し、その指導書認定の基準を各民間團體に依頼するにいたつたのである。従つて日本山岳會もその基準に従つて指導書を認定しなければならぬ。

認定基準は日本山岳會會長並に各支部長が適當として推薦した者となつてゐる。尚細部に關しては各縣を通じ各民間團體に書類をもつて依頼ある豫定。

國體登山委員會の發足

會報一七九號でお知らせした國體登山委員會は、全岳連側と協議の結果諒解點に達したので七月十五日より左記規定の如く、正式に發足することになり、七月十九日午後七時より本會ルームに於て第一回の委員會を開きました。常任委員の氏名は次の通り。本會 入澤文明、渡邊公平、折井健一、千谷壯之助、金坂一郎、尾關廣、高橋定昌、岳連側 尾關廣、北島隆、釣巻俊夫、村松清、北島隆、釣巻俊夫、尚規定により委員長は本會々長、別宮俊と決定。

國民體育大會登山部門委員會規定

第一章 總則

第一條 國民體育大會登山部門(以下國體と略稱)の圓滑なる運営を期するため社團法人日本山岳會内に國民體育大會登山部門委員會(略稱國體登山委員會)を置く

第二條 本委員會は社團法人日本山岳會(以下山岳會と略稱)と

ある。従つて日本山岳會もその基準に従つて指導書を認定しなければならぬ。

全日本山岳連盟(以下全岳連と略稱)との合同委員會とする

第三條 本委員會の事務所は山岳會内におく

第四條 本委員會は國體に關する事項を處理する

第二章 登錄

第五條 各都道府縣體育協會(以下縣體育協、略稱)に所屬する山岳會支部、山岳連盟(協會)は本委員會に登録することが出来る

第六條 登録は所定の申込書に登録料金二〇〇圓を添へ縣體育協經由して毎年六月卅日までに申込むものとする

第七條 國體に選手として參加し得るものは登録團體に屬するものに限る

第八條 本委員會に登録しようとする團體はアマチュアでない構成員を含んではならない

第三章 役員

第九條 本委員會の役員は委員長、常任委員、特別委員及び委員とし必要に応じて顧問、參與等を委嘱することが出来る

第十條 委員長は山岳會々長とする

第十一條 常任委員は左により選任する

一、山岳會の推薦するもの 五名

二、全岳連の推薦するもの 五名

第十二條 特別委員は左により選任する

北海道、東北、關東、北陸、中部、關西、中國、四國及び九州の各ブロック内の登録團體を代表するもの各一名

第十三條 委員は登録團體が各一名づつ推薦する

第十四條 役員の任期は一年とする

るが重任をきまなければならない

第十五條 役員に缺員を生じた場合は前各條により補充する補充役員の任期は前任者の殘任期間とする

第十六條 委員長に事故あるときは常任委員の互選により委員長代理を選任する

第四章 會議

第十七條 本委員會の會議は委員長總會及び常任委員會とし委員長が之を招集してその議長となる會議の議決は總て多數決制とする

第十八條 委員長總會は本委員會の最高意志決定機關であつて、毎年二回五月と國體開催時に開く

但し常任委員會が必要と認るとき又は委員の五分の一以上のものが連名で議案を明示して委員長總會の招集を請求するときは三十日以内に臨時委員長總會を開催する

第十九條 委員長總會は常任委員、特別委員及び委員を以て構成し委任状による出席を認める、但し二つ以上の役員を兼ねるものの議決権は一票とする

第二十條 常任委員會は、本委員會の執行機關であつて、隨時必要に應じ開催し常務を處理する

特別委員は常任委員會に隨時出席して意見を述べることが出来る

第二十一條 會議の招集には議案を明示して、委員長總會は招集日を含む二十日以前、常任委員會は同十日以前にその通知を發送する、但し緊急の場合はこの期間を短縮することが出来る

常任委員會の通知は特別委員

にも發送しなければならぬ
 第二十二條 會議の議事録は本委員会の全役員、登録團體に送付する

第五章 會計

第二十三條 本委員會の經費は山岳會及び全岳連の支出金及びその他の收入をもつてあてゐる
 第二十四條 本委員會の會計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る

附則

第二十五條 本委員會は財団法人日本體育協會が全岳連を認證するまでの機關とする
 第二十六條 本規定による委員會成立と同時に從來山岳會内にあつた國體委員會は解散する
 第二十七條 昭和三十年年度の登録締切日は第六條の規定にかかわらず昭和卅年八月卅一日とする
 第二十八條 第一回就任の役員の任期は第十四條の規定にかかわらず昭和三十一年度役員就任までとする
 第二十九條 本規定は昭和卅年七月十五日より施行する

會務報告

役員會

五月 理事會(十三日)
 出席者、松方副會長、理事、入澤渡邊、交野、小原、沼倉、外山折井、辰沼、今村、吉阪、千谷大塚、村山、評議員、沼井、神谷、岩水、監事、石原、圖書委員、初見

一、理事事務分擔の件、
 (1) 常務理事を左記五名に決定入澤、成瀬、小原、沼倉、辰沼
 (2) 各理事の事務分擔は新常務理事にて検討の上決定し通知する
 (3) 圖書委員報告、戸野外八名位に依頼して圖書整理を續行し、遅くとも八月頃迄には完了し、會員に貸出、利用の出来る様に努力する。尚書庫の建設は五十周年記念事業の一つとして是非實現したい。
 二、評議員推薦の件、
 三、國體委員會經過報告
 規定案を體協に提示して協議の結果、次のことを条件として諒承。
 (1) 委員會は山岳會の組織内に置き、委員長は山岳會會長の兼任とする。
 四、西堀、成瀬、カトマンズ派遣の件、
 ネパール政府とのマナスル登山に關する連絡折衝のため、去月二十九日兩氏羽田を出發。
 五、京大學術探險隊の件
 壮行會を開く余裕がないので本會より交野、沼倉、折井が宿舍を訪問、壯途を祝つた。
 六、秋田岳連登山講習會出席報告の件、
 七、新旧役員交歓會開催の件
 六月 臨時役員總會(二十二日)
 出席者、別宮會長、日高副會長、理事、入澤、成瀬、沼倉、渡邊辰沼、今村、吉阪、千谷、金坂村木、折井、評議員、沼井、神谷、岩永、三田、村井、監事、石原、加藤、(C・A・F連絡員)近藤等

議事

一、模前會長に記念品贈呈の件
 二、理事事務分擔の件
 左記の如く決定
 (a) 總務部 (總務)入澤、(經理)沼倉、(財務)外山、(集會、支部)交野(渉外)折井、(出版部、會報)渡邊、吉阪、(山日記)渡邊、(山岳)村山、
 (c) 事業部、(國體)渡邊、千谷、金坂、(指導)辰沼、山田、大塚、(研究)今村、村木。
 三、五十周年記念事業委員會設置の件、事業として「記念出版」「講演會」「記念絵葉書」「記念パツヂ」作製の案。實行委員は、入澤、成瀬、小原、沼倉、辰沼、交野、村山
 四、フランス山岳會代表來日の件
 佛山岳會より左記參氏が來日する事に決定した。斡旋方法は常務理事會に一任。
 T・J・ラングパン氏
 E フレンド氏
 プロヴィエ・シヤベル夫人
 五、富士山雪崩遭難處理報告の件
 六、國體委員會、經過報告
 七、ネパール政府、並に關係先交渉經過報告、(成瀬報告参照)
 八、會計報告

圖書基金寄附(敬稱略)
 ▽壹千圓 牧野 衛
 ▽參百圓 太田 廣
 ▽貳百圓 福住修治 羽鳥 肇
 早川昭宏
 松田雄一 神保信雄
 累計 金貳萬九百圓

昭和三十年七月廿五日發行
 東京都千代田區
 神田駿河臺四ノ六
 社團 日本山岳會
 發行人 渡邊 公平
 編輯者 渡邊 公平
 電話 神田(25)八九五二番
 振替口座東京四八二九番
 東京都港區赤坂浦池五番地
 印刷所 株式会社 技報堂

登山用具の専門店
好日山莊
 中央銀座前二・五
 TEL 京橋(56) 3600
 カタログ送呈

寄附金(敬稱略)
 ▽貳萬圓 石井辰五郎